

聖書:ヨハネの福音書19章23～30節

説教:わたしは渴く

はじめに

主の苦しみと復活を覚える受難節を過ごしております。この季節、主が十字架において私たちに教えてくださったことについて振り返ります。今朝は二つのことを考えてまいります。一つ目は、イエスが母マリアのことを「女の方」と呼んだこと。二つ目は、イエスが十字架で発せられた最後のことばである「わたしは渴く」。

1 「女の方」

1) なぜ?

そこでまずイエスが自分の母親を「女の方」と呼んだことについて。26節。「イエスは、母とそばに立っている愛する弟子を見て、母に「女の方、ご覧なさい。あなたの息子です」と言われた。」母親と関係がギクシャクしている息子であれば、まるで他人のように「女の方」と呼ぶこともあるかもしれませんが、イエスの場合はそんなことは考えられません。それなのになぜ「女の方」と呼ぶのか。皆さんも不思議に思うでしょう。また、そばに立っている「愛する弟子」についてもそうです。これはこの福音書を書いたヨハネのことではないかと言われているのですが、その彼を「あなたの息子です」と言っています。もちろん彼はマリアと血のつながりはありません。

2) 神としてさばきを受けられる

実は、イエスがマリアのことを「女の方」と呼ぶのはこれが初めてではありません。イエスが宣教を始めてまだ間もなかった頃のことです。結婚式の披露宴を仕切っていたマリアはぶどう酒が足りないことに気がつき、困ってしまう。マリアがそのことをイエスに伝えると、イエスは「女の方、あなたはわたしと何の関係がありますか。わたしの時はまだ来ていません」と答える。マリアはこのことばを聞いて戸惑います。でもマリアは忍耐強い人ですから、「わたしの時」とはなんだろうか。その日以来、ずっと考えていったと思うのです。それがいま、十字架の上からイエスが再び「女の方」と呼びかけてきた。これを聞いてマリアはすべて了解しました。「わたしの時」とは、十字架のことばだったのです。

「女の方」と言われたら、なんだか冷たいように聞こえますが、決してそういうことではない。イ

エスは、マリアの息子として、もっと言えば一人の人間として十字架におかかりなるのではないのです。この方は、神として十字架に向かおうとされている。十字架で神のひとり子が父なる神のさばきを受けられる。そのことを端的に表しているのが、「女の方」だったのです。

2 わたしは渴く

1) 聖書が成就するために

その十字架でどのようなことが起きたのか。次に28節を読みます。「それから、イエスはすべてのことが完了したのを知ると、聖書が成就するために、『わたしは渴く』と言われた。」「聖書が成就するために」とありますが、これは詩篇69篇21節のことを指しています。

そこにどんなことが書かれているのかを見る前に、少し考えてみましょう。皆さんは「聖書が成就するために」と聞いてどんなことを想像するのでしょうか。たとえば私はこんなふうに思ってしまう。十字架という大舞台に立ったイエスは、あたかも俳優のようにセリフを語る。そのセリフが詩篇69篇。でもどうして詩篇なのでしょう。十字架のことばとして選ばれたのですから、そこにはなにか大きな意味があるはずで

2) 父なる神に叫び続ける

では詩篇69篇にはなにが書かれていたのか。全部は見ることはできませんが、主だったところを見ただけでおおよそつかむことができます。1節は「神よ 私をお救いください。」から始まり、敵が自分を囲んで嘲っているという内容が続き、20、21節に至ります。「嘲りが私の心を打ち砕き、私はひどく病んでいます。私が同情を求めてもそれはなく 慰める者たちを求めても 見つけれません。彼らは私の食べ物の代わりに 毒を与え私が渴いたときには 酢を飲ませました。」

これは十字架の場面そのものです。イエスが十字架でなにをされていたのか詳しく書いてある。イエスは、父なる神に向けて叫び続けていました。私たちは十字架と聞くと、釘に打たれた手や足が痛くてつらかったらとすぐ考える。ところがこの詩篇にはそういうことばはほとんどない。代わりにあるのが、「嘲りが私の心を打ち砕き」とか「同情を求めてもそれはなく」というように、徹底的

にこの世の人たちからのけ者にされていった苦しみです。そのようなところから救って下さいと父なる神に叫び続けて疲れ果て、それで「わたしは渴く」と言われた。

3) 父なる神に完全にゆだねる

この声を聞いていたローマ兵は、酸いぶどう酒を海綿に含ませてイエスの口元に差し出します。酸いぶどう酒には、痛みをやわらげる鎮静剤のような効果があると言われることがあります。しかしいま見たとおりイエスは人々に捨てられたことを一番苦しんでいた。もちろんからだの痛みはありましたが、酸いぶどう酒で楽になりたいという思いはありません。というのは、詩篇69篇にこうあるからです。「彼らは私の食べ物代わりに、毒を与え(た。)」酸いぶどう酒は、イエスをからかうために差し出されたものだったと読むべきでしょう。

このように、詩編に書かれていたことがすべて行われたのをご覧になったイエスは最期に、「完了した」と言われ、頭を垂れて霊を父なる神にお渡しになり、この後のことはすべて父なる神にゆだねます。

3 イエスが示された信仰

1) 無力になられる

イエスはからだの不自由な者をいやし、息子を亡くしたやもめを見つければ泣きながら駆け寄り、その息子を生き返らせもしました。あるときは、五千人の人々が満腹するほどのパンを差し出し、弟子たちの見ている前で湖の上を歩くことさえできました。人々からは大スターのように持ち上げられ、この人は必ずイスラエルの王となって自分たちを幸せにしてくれるに違いないと大いに期待されました。

ところが、イエスがあっけないほど簡単に逮捕され、裁判にかけられ、たった数時間のうちにみずぼらしいお姿になってしまう。弟子たちもこれには驚きました。この方に力があるからこそ従ってきたのです。イエスが何もできなくなったのなら、もう従う意味はない。いやそれどころか、お前もイエスの仲間だろうと言われて殺されるかもしれない。恐くなって逃げてしまいます。群衆も、ついさきほどまで「イスラエルの王」と言って喜んでいたので、急に手のひらを返すようにして、罵りと蔑みと嘲りの声で叫びだします。

2) イエスの祈り

この受難週の季節、私たちはイエスが十字架で教えてくださったことがなんであったのかを思い起こしたいと思います。イエスは十字架で痛みと苦しみをぐっと我慢していただけ、ではありませんでした。詩篇69篇13, 14節にこうあります。「しかし私は 主よ あなたに祈ります。神よみこころの時にあなたの豊かな恵みにより御救いのまことをもって私に答えてください。私を泥沼から救い出し沈まないようにしてください。私を憎む者どもから大水の底から救い出してください。」

イエスは祈っていました。「私を憎む者ども」とは罪のことであり、罪がもたらすところの死のことであります。この方は罪のない方ではありますが、私たちの罪を背負われたがゆえに罪人と同じ姿になられました。そのために父なる神からさばきを受け、死んで行かれます。主はそのような十字架を忍ばれます。そのとき、「大水の底から、救い出してください」と祈ります。いま自分は十字架で死んでいくけれど、必ず死からよみがえらせてくださり、救って下さると信じて祈っておられました。

3) イエスの信仰のあとをたどる

ご自分が救われることだけを祈っていたのでしょうか。ご自分を十字架につけた人たちは滅んでしまえと憎んでいたのでしょうか。ここだけ読めば、そのようにもとれます。しかしもし主が死からよみがえられなかったなら、私たちはどうなっていたでしょう。主が三日目に死からよみがえられたからこそ、私たちは安心してこの方に私たちの歩む道をゆだねることができる。「大水の底から、救い出してください。」これはイエスが自分ひとりのために祈りではない。むしろ主は、ご自分を捨てた人々のため、つまり私たちのために祈っていたのでした。

まとめます。主は十字架で私たち二つのことを教えてくださいました。一つ目。イエスが自分の母親に「女の方」と言われたとき、人としてではなく神のひとり子として十字架におつきになりました。父なる神に立つてとりなすことは人間ではできないのです。神のひとり子にしかできないわざだったからです。

そして二つ目。主は人々から見捨てられることに苦しみながら、父なる神が救って下さるのだとの信仰を守り通し、信仰の模範とられました。たとえ何もかも失って、死を目の前にしても、もし救

い主イエス・キリストを信じるならば、あなたも主と同じように死からよみがえり、天の御国に迎えられて安らぐことができる。そのことを信じ続けなさい。

主はこのようにして、私たちが向かうべき天の御国の入口を十字架において示し、ここに来なさいと招いてくださいます。